広島芸術学会 芸術展示《制作と思考》第12回展

「Sweet Home－家庭の美学」（報告）

会期：2021（令和３）年３月16日（火）～21日（日）
会場：広島県立美術館 地階 県民ギャラリー（４室・５室）

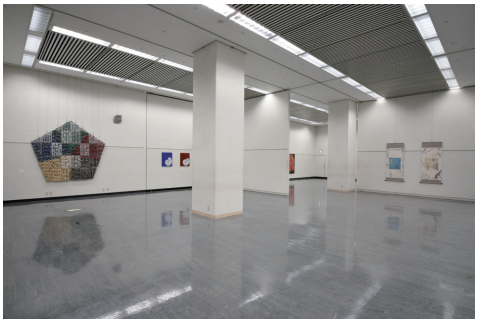
広島芸術学会の「芸術展示」は1996年に第１回展が実施され、以後、原則隔年で開催を続けてきた。毎回テーマを設定し、このたびは、第12回目となる芸術展示「Sweet Home－家庭の美学」を開催した。出品作家は広島芸術学会会員14名と、ゲスト作家２名の計16名。入場者数は404名。新型コロナウイルスの感染拡大が続く最中であったため、これまでの芸術展示で実施してきたアーティスト・トークのようなイベントは控え、各作家の制作意図を記した目録を配布することで、作品への理解を深めてもらうように努めた。

テーマについては、世界を一変させた新型コロナウイルスの感染拡大に端を発した。緊急事態宣言等による外出の自粛、テレワークの普及、海外へ/からの渡航制限など、コロナ禍によって家庭で過ごす時間は増大した。それによって「家」に対する我々の考え方は緩やかに変容したのではないかという着想のもと、広い意味で「家」を取り上げた作品を募集した。家＝Homeという言葉には、家庭、家族、故国、原産地、宿泊所、療養所など多様な意味が見られる。フロイトの示唆を借りれば、「家」は、慣れ親しんだものであると同時に隠匿された不気味なものであるともいえ、出品者による幅広い解釈も期待できると考えた。そして実際、本展においてはそれぞれの出品者が作家ならではの視点で「家」という概念を捉え、素晴らしい作品を出品いただいた。以下、便宜的に実際の展示順に出品作品を紹介する。

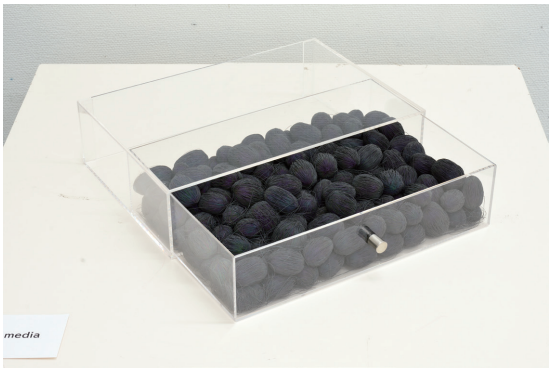
草地里帆さんの《mixed media》は、蚕の「家」ともいえる繭状の物質が、鑑賞者の立ち位置により異なった色調を見せることで、蚕糸という素材が時代とともに在り方・見え方を変容させてきたことを感じさせた。ゲスト作家のひとりである手嶋勇気さんは、近年、ドローイング制作アプリを用いてスマートフォンの画面上に風景を描き、それをカンバスに油彩で複写するという手法を用いており、自宅の窓からの眺めを描いた風景画をこのたびは出品いただいた。田川久美子さんは、荒々しい筆致を的確に制御した抽象画を出品された。家という場所が作品と向き合い、思考を深めていく場であるということを感じさせる画面構成であった。薮野圭一さんは、これまでの作品を発展させ、独自の趣向による半立体作品を出品された。鑑賞する位置によって見え方が異なるその作品は、見ることの根源的な楽しさを思いださせるものであった。小田茂一さんの作品は、コロナ禍において自由な行動が取れない日々が続く中、日常の風景を切り取り、自らの気分を可視化したというものであった。船田奇岑さんは、「家」と「外」という対比的な関係を、表装、補色、質感、様式、明暗、二次元/三次元など様々な対立項を埋め込みながら構成した。ゲスト作家の中山いくみさんには、黒い雨に着想を得たという学生服の少年を窓越しに描いた作品と、とあるモデル/カリスマ漫画家がピンク色の家具にあふれた自室を背景とした肖像画を出品いただいた。才田博之さんには、展覧会の主旨に真っ向から向き合っていただいた。江戸期から続く広島の歴史・文化と、コロナ禍にまつわる表象・情報を画面上に見事に折り重ね、見る者の印象に強く残る大作を描かれた。千田禅さんは、卵の容器という家庭的ともいえる素材を用いながら、家（ホームベース）型の五角形と陰陽五行思想とを掛け合わせた大作を展示した。三浦実一さんは、長きにわたり絆をテーマに作品制作して来られ、本展では母子像にも見える柔らかな形態の抽象画を出品された。広田和典さんは、広島陸軍被服支廠という被爆建物－被爆直後の人々が身を寄せた場所を力強く、しかし寂寥感も同時に感じさせる大作を描いた。平野邦明さんは、人の生きざまを「居・座・屈・伸・翔」の５ステージで描いており、本展では「不動の動」を表しているという人物像を出品された。根木達展さんは、一貫して生に対する想いを描き続けており、出品作においてもそうしたテーマが強く表現されていた。越川道江さんの抽象画は、色を重ね、ときに画面を削ることで、後景から滲み出てくるような複雑な色面を作っていた。そこには「家」の多様なイメージが含まれていると考え、今回のチラシのメインビジュアルとして掲載した。岡孝博さんの蛸壺を用いた彫刻作品は、素材の組み合わせの妙によって、多様な物語性を喚起させるものであった。范叔如さんによって描かれた風景画は、人物が描かれていないが、しかしそこには何か/誰かの痕跡を感じさせる空気感があり、これもまた見る者の想像を掻き立てる作品であった。

各作品についての詳細は割愛させていただいたが、いずれも企画者の想像を超えた作品を出していただいたように思う。芸術展示の担当は今回で２度目となったが、短い応募期間であったにもかかわらず、力作を出品いただいた作家ならびに関係の皆様に改めて感謝を申し上げる。それとともに、研究者だけではなく、作家会員も擁している本会ならではの企画が今後も発展的に実施されることを祈願したい。

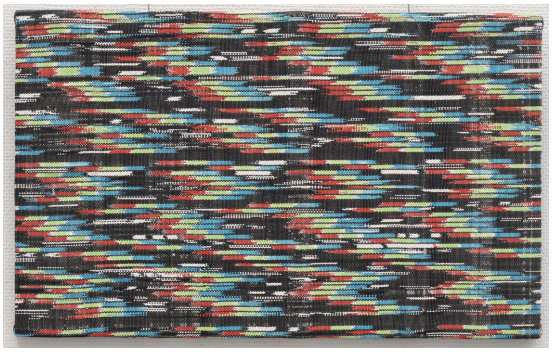
（展覧会企画者　山下　寿水）



会場風景

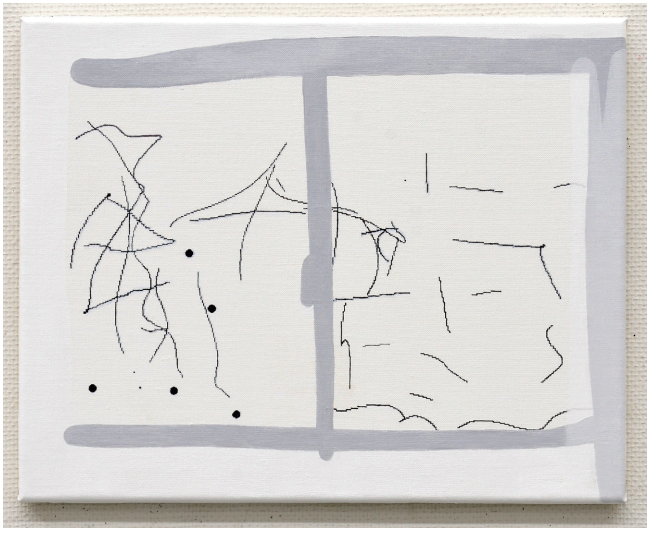


草地　里帆「mixed media」2020年



草地　里帆「television」2018年

田川　久美子「牙を剝く」2020年



手嶋　勇気
「Conversion from Cube（AID#27)」2021年

手嶋　勇気
「Study for window」2020年

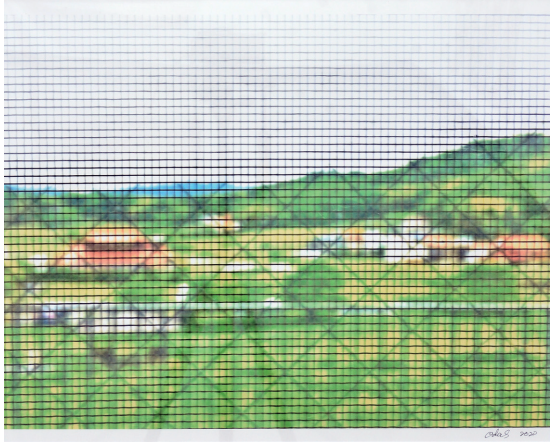
船田　奇岑
「家のある風景」2021年

船田　奇岑「外と中」2021年

中山　いくみ
「BISUKO-TAN」2021年

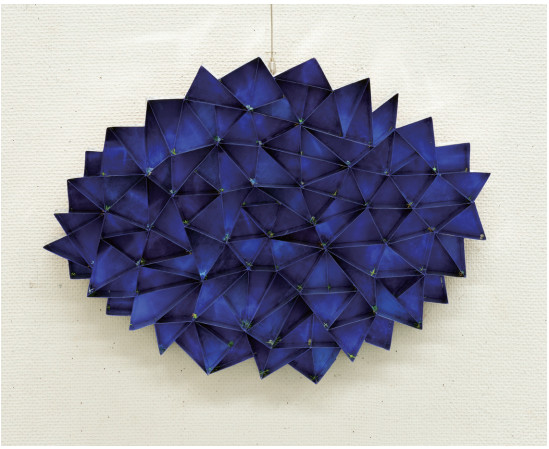
中山　いくみ「Kの肖像」2014年

才田　博之「ホーム」2021年



小田　茂一
《2020年春、コントロールされた記憶２》
2020年

小田　茂一
《Stay Homeの永き日々》2021年

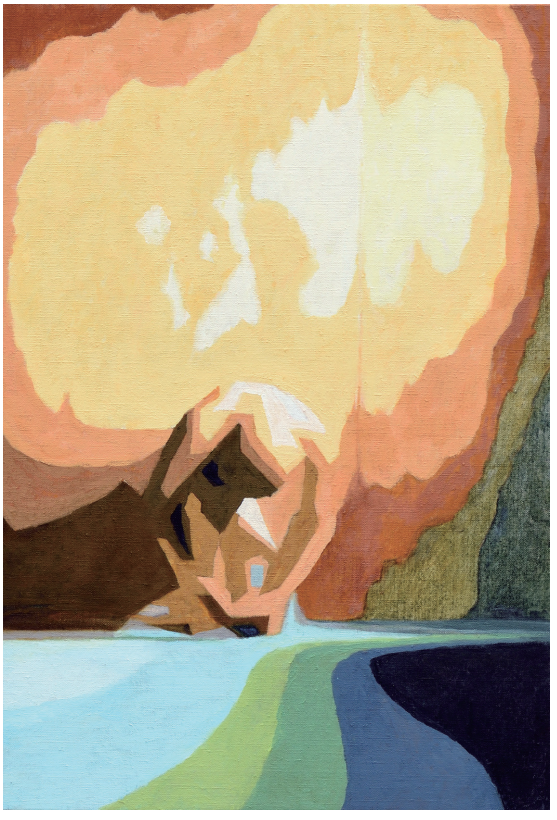


薮野　圭一
「モシカシテホシゾラノ　キズナ」2021年

薮野　圭一
「モシカシテヨゾラニウカブファミリーザ」
2021年

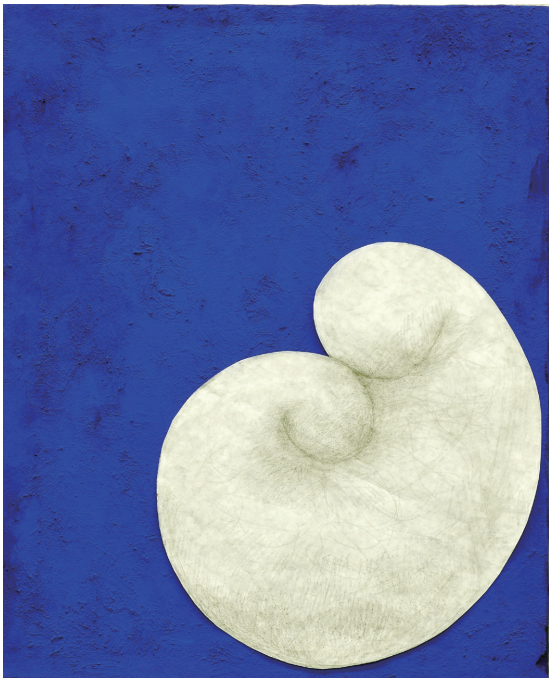
広田　和典「家になった家」2021年

根木　達展「生(き)ー擁護」2019年

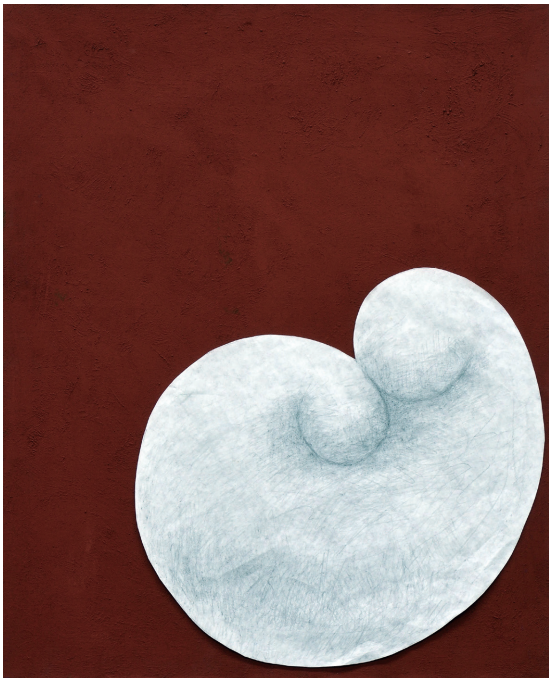


平野　邦明「stay ー居ー」2021年

千田　禅「家」2019-21年



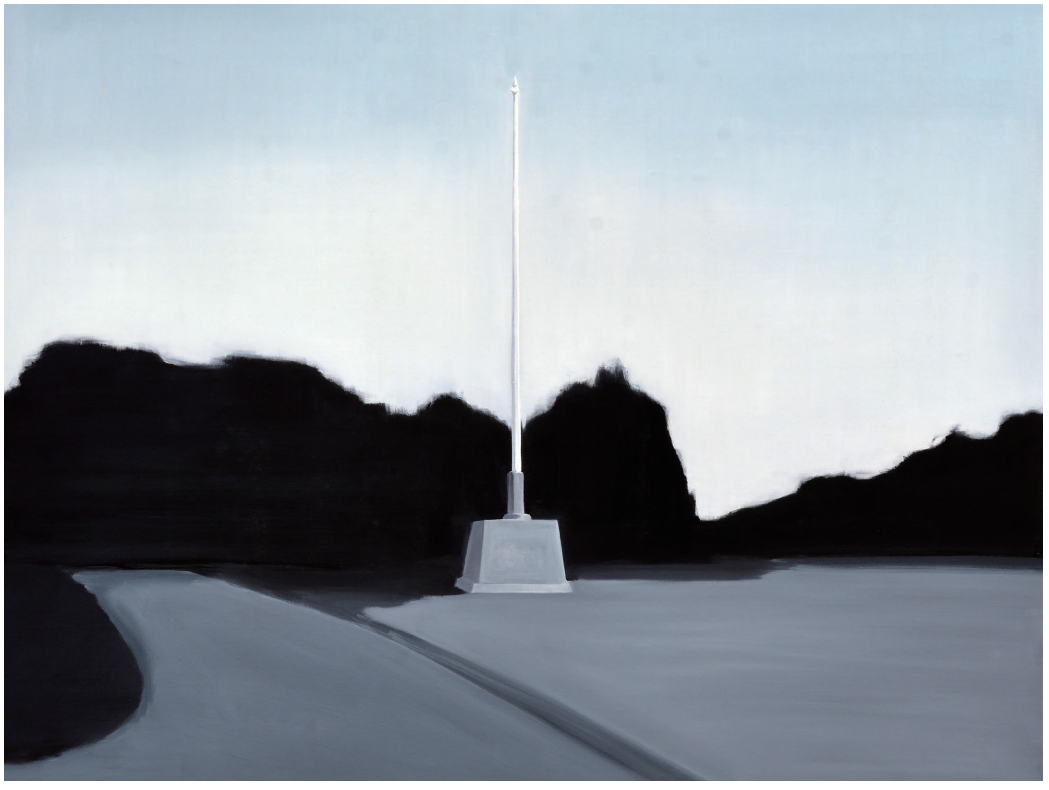
三浦　実一「〇〇の絆」2021年



三浦　実一「〇〇の絆」2021年

越川　道江「Sweet Home 2021」2021年

越川　道江「あかり」2020年



范　叔如「空景」2007年

岡　孝博「RAIL WORK－在処」2020年